

月報	日本キリスト改革派 横浜中央教会	9月号 2010年9月19日
----	---------------------	-------------------

## 「天路歷程」を読んで

I.N

6月の初旬に海外へ旅行に行きましたが、行き帰りの飛行機の中で本を読んで過ごしました。その本は「天路歷程」という本で、かなり前に立石先生が論壇で紹介していたと思います。以前から時間があれば是非、読みたいと思いつつ、アメリカに旅立つ直前に思い出し、旅行の手荷物と一緒に持って行きました。

簡単に紹介しますと、この本は1678年英国のジョン・バニヤンが書いた物で、世界中で聖書に次いで読まれている本だそうです。既に読まれた方も多いのではないのでしょうか。物語は、あるキリスト者の巡礼の旅を、聖書の引用聖句を豊富に用いて描いている小説です。その描かれているキリスト者の巡礼の旅の途上で多くの苦悩、誘惑があり、その苦しみから救い出された喜びと感謝の讃美が、読者の私たちクリスチャンの信仰生活と重なるところが、長年この本が読み継がれている理由ではないかと思います。

このような信仰の戦いをテーマにした小説を書いたバニヤン自身、17世紀の英国で信仰の戦いを戦い抜いた一説教者でした。当時の英国で、国が認めない非国教徒として迫害され、公の場で説教したというかどで、牢獄に計12年間も入れられていたようです。そこで様々な人々と出会い、色々な人間性と触れた事が、小説の登場人物を生み出すベースとなったそうです。

この小説を読んで深く印象に残ったのは、物語の中心に神様の一方的な恵みによって罪人は救われるという教理が据えられている事、主人公が楽しげに信仰生活に有益な話を、旅の道連れと延々と続ける場面、そして、私たちがこの世の旅路を終えた後に約束されている、天の御国の描写（黙示録からの引用が多い）が心に残り、天国の雰囲気を感じながら読みました。

この本を読んでから、ぼーっとしている時は何時も、無意識の内に天国の事、この世の信仰生活の事を考えている事が不思議な感じでした。アメリカの旅行から戻り、再び忙しい日常に戻ると、そのような思いがまた少しづつどこかに追いやられていくような気がしています。また良い本に出会いたいと思います。

## 「ローマン・ブリテン」

T.K

図書の共同購入で見つけた一冊の本。岩波少年文庫のローズマリ・サトクリフ著「第九軍団のワシ」(猪熊葉子訳) 中高生にお薦めとあった。ローマが舞台上で読み応えがありそうと思い、注文欄に「1」を書き込んでしまった。その後「1」だけでは済まなかった…。

彼女によると、イギリスの歴史教科書は1066年のノルマン人によるイギリス征服から本格的に書かれることが多く、「三千年もあった先史時代のブリテンについてはただの三ページほどがさかれているにすぎ」ないそうだ(神話を歴史事実かの如く教えたがる国もあるが)。そこで、彼女はローマ軍がブリテンに存在していた450年の歴史の一部に焦点を当て、歴史小説家としての地位を確立したのである。

ローマはブリテン島にまで勢力を伸ばしていたが、その勢力が弱まってくるとブリテン島の原住民 土着の氏族(いつの世も、どこの国も異なる民族を野蛮人と呼ぶ)との戦い、また北方にいた海賊・サクソン人(金髪、青い目)との戦いが続くようになり、その攻防がこの物語の背景となっている。

紀元117年頃、ブリテン(現在のヨーク付近)に駐屯していた栄えあるローマ第九軍団が、北部平定のため北進したまま軍の象徴のワシと共に帰らなかったという事件があった。この本はそれを題材とし、その軍団長の息子が父の名誉挽回のため、北にいる土着の氏族と戦い、ワシを奪還して帰ってくるという冒険物語である。「サスペンスに富む事件の展開が、無駄の無い、きびきびした筆致で、くっきりと書かれ」、読者はぐいぐいと物語に引き込まれていく。綿密な時代考証で、「ローマン・ブリテン時代の風俗・習慣などが目に見えるように、まざまざと描き出され」ている。

続けて彼女は、「銀の枝」、「ともしびをかかげて上下」、「辺境のオオカミ」を執筆し、それらは「ローマン・ブリテン4部作シリーズ」と呼ばれている。それらの年代はかなり飛びながらも、主人公たちは常に第一作の主人公の子孫たちである。彼らはそれぞれが生き、置かれた時代の枠の中で葛藤し、困難に遭い、失意を経験し、そこからどのように生き抜いていったかを、彼女は実に上手に描いている。また、必ずしもハッピーエンドとはいえなくとも、それぞれが納得のいく終わりになっている。

テレビで人気があった「獣の奏者」の作者、上橋菜穂子さんは、このシリーズが自分の原点であると言い、「『本を読んだ』という感じではなくて、圧倒的な力を持つ嵐が頭の中を吹き荒れ、それが、ゆるやかに消えて、しずかな夜の中に残されたような気がしたものだ(後略)」と記している。

大人が読んでも大変面白く興味深いシリーズである。しかも子供向けなので文字が大きい。視力が衰えてきている私には大助かりである。そして、「イギリス=ジェントルマン、アンゴロサクソン人の国」という画一的なイメージとローマ帝国のイメージが少し変わるかも…。

## オリーブの会

K.K

報告が遅れましたが今まで婦人会と呼ばれていました会の名称をこの度オリーブの会と変えました。7月から週報などでは使われ始めています。

私が婦人会の会長を引き受けてから3年目の夏となりました。会員の中から、婦人会というと、既婚者の集まりという限定されたイメージがあるという声が出てきました。確かにそうかも知れません。イメージに縛られて会が成長しないのも困ります。いろいろな年代のいろいろな立場の人がいる事により学ぶことは多いはずです。そこで思い切って呼び方を変えようという事になりました。

数ヶ月にわたり話し合いを続け沢山の候補があがり最終的には多数決で決まりました。結構、楽しい時間でした。

現在もたどたどしく会長を続けている私ですが支えて下さる方たちの優秀さと親切さにいつも助けられています。パソコンも携帯電話も基本的な事しか出来ない者にとり何か役を引き受ける事は現代においては気後れするところが有ります。自分でも、もう少しパソコンを自由に使えれば教会での仕事の幅も増えるのに、と思うのですが学ぶ事に消極的な、頑固で怠け者の困った私です。オリーブの会の皆さんが今、不足している分の白い椅子カバーを製作中です。クリスマスまでの完成を目指しています。もう少しお待ち下さい。

### 募集中

オリーブの会の会員

むずかしい決まりはありません。

毎月 第3日曜日に例会 聖書を読んだり、思いつく事を話しあったりしています。

会費は一ヶ月 200円です。

ただし 女性しか入会できません。